

128

2020 SPRING

美術館NEWS



「美術館の紹介」Vol. 28

美術館に入ると、古代ギリシャ建築に着想を得たかのような柱頭と溝彫りをもつ柱に出くわす。古代建築のモチーフは黎明期の西洋の美術館でも盛んに用いられた。古代、近代と過去の歩みをたどりながら、建築家は当館を設計したのだ。



岡山県立美術館

OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

高畑勲とその作品世界

橋村 直樹(学芸員)



かぐや姫の物語 ©2013 畑事務所・Studio Ghibli・NDHDMTK

『アルプスの少女ハイジ』(1974)や『火垂るの墓』(1988)、『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994)や『かぐや姫の物語』(2013)といった誰もが知っている作品を生み出したアニメーション監督・高畑勲(1935-2018)。常に今日的なテーマを模索し、それにふさわしい新しい表現方法を追求した高畑は、戦後の日本のアニメーションを牽引し続けるとともに、国内外の制作者に大きな影響を与えてきた。絵を描かないアニメーション監督として知られる高畑の演出術に注目し、その革新性や秘密に迫る大規模な回顧展が、昨夏、東京国立近代美術館で開催された(2019年7月2日～10月6日)。およそ3か月間の会期中に展示会場を訪れた約14万人の来場者は、緻密な制作ノートや絵コンテなど多数の資料に圧倒され、さらには宮崎駿をはじめ大塚康生や小田部羊一、近藤喜文や男鹿和雄、あるいは山本二三といった高畑作品を支えた制作者たちによる原画やセル画、イメージボードや背景画に魅了され、高畑作品の世界を十分に堪能したことだろう。同展は、今春、高畑ゆかりの地にある岡山県立美術館において開催される(2020年4月10日～5月24日)。ここでは高畑の代表作をいくつか取り上げながら、そこに施された工夫や新しい表現方法について概観していきたい。

1935年に三重県に生まれた高畑は、8歳の時、教育者だった父・高畑浅次郎の転勤にともなって岡山市に引っ越し、高校を卒業するまで岡山で過ごした。移住した翌年、高畑は「ごく平凡な人生でいちばん大きな事件」^{※1}と後年振り返ることになる岡山空襲に遭遇している。東京大学に進学して仏文科に学び、卒業論文ではフランスの詩人ジャック・プレヴェールをテーマとした。そのプレヴェールが脚本を書いたアニメ映画『やぶにらみの暴君』(1952)を学生時代に見てアニメーションの道に進むことを決めた高畑は、大学卒業後、1959年に東映動画(現・東映アニメーション)に入社し、アニメーションの演出家を目指すことになる。同社では『安寿と厨子王丸』(1961)や『わんぱく王子の大蛇退治』(1963)で演出助手を務め、テレビシリーズの『狼少年ケン』(1963～1965)で演出を担当した。その後、『太陽の王子 ホルスの大冒険』(1968)で初めて長編アニメ映画の演出(監督)となり、約3年の歳月をかけて、主人公ホルスが村人たちと団結して悪魔を倒す壮大な物語を完成させた。本作では制作に携わる人々が平等に作品の内容に関わるができるよう、登場人物の複雑な人間関係を理解するための相関図などが作られ、スタッフ全員で共有された^{※2}。

1971年に高畑は、小田部羊一と宮崎駿とともに東映動画を退社してAプロダクションに移り、『パンダコパンダ』らの作品を制作した後、73年に再び小田部・宮崎とともにズイヨー映像に移籍した。ズイヨー映像とその後の日本アニメーション株式会社では、有名なテレビ名作シリーズの『アルプスの少女ハイジ』(1974)、『母をたずねて三千里』(1976)、『赤毛のアン』(1979)で演出を務めた。ハイジの準備中にアニメでは異例のロケハンをスイスとドイツで行ない、そうした綿密な取材が、衣食住や自然との関わりといった日常生活を丹念に描写する高畑らしいリズムを生み出すことになった。

1981年に高畑はテレコム・アニメーションフィルムに移籍する。そこで制作したのが『ジャリン子チエ』(1981)であり、この作品でも高畑は美術監督の山本二三とともに大阪でロケハンを行ない、安宿に泊まって大阪の下町を体感することで原作の舞台を具体的に描き出した。『ジャリン子チエ』をはじめ1980年代以降の高畑作品は日本が舞台となり、『ゼロ弾きのゴーシュ』(1982)、実写映画『柳川掘割物語』(1987)、『火垂るの墓』(1988)、『おもひでぽろぽろ』(1991)、『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994)と展開していった。その間、宮崎作品の『風の谷のナウシカ』(1984)と『天空の城ラピュタ』(1986)でプロデューサーを務め、1985年に宮崎駿、鈴木敏夫とスタジオジブリ設立に係わり、亡くなるまで同所属となった。『火垂るの墓』では「防空頭巾だけはしっかりとかぶり、すぐ上の姉と2人、岡山の街に降り注ぐ鉄と油と火の雨の下を逃げまどっていた」^{※3}という少年時代の岡山での空襲体験が、焼夷弾の雨をくぐりながら逃げる清太と節子の場面に反映され、近藤喜文の作画と山本二三の背景美術によってリアルに描き出されている。『おもひでぽろぽろ』では、「山形編(1982年)」と「思い出編(1966年)」で「現在」と「過去」を2つのスタイルで描きわけるといふ演出に挑戦し、近藤の作画と男鹿和雄の背景美術によって見事に達成された。

高畑は『ホーホケキョ となりの山田くん』(1999)でアニメーションの表現形式に決定的な変革をもたらした。それは人物と背景が一体化したスタイルの採用であり、デジタル技術を駆使して手描きの線を生かした水彩画風の描法によって達成された^{※4}。その線描と余白を生かした淡彩の描法による進化・完成形が遺作となった『かぐや姫の物語』(2013)であり、とりわけ線描が印象的なのが、かぐや姫が怒りと悲しみに駆られて屋敷から飛び出し、十二単を脱ぎ捨てて疾走する場面といえるだろう。

豊富な知識を背景に原作を読み込み取材を重ねてリアリズムを志向したアニメーションの巨人・高畑勲。その演出術の核心に迫ることのできる「高畑勲展—日本のアニメーションに遺したもの」にぜひご期待いただきたい。

※1 高畑勲『映画を作りながら考えたこと』徳間書店、1991年、433頁。

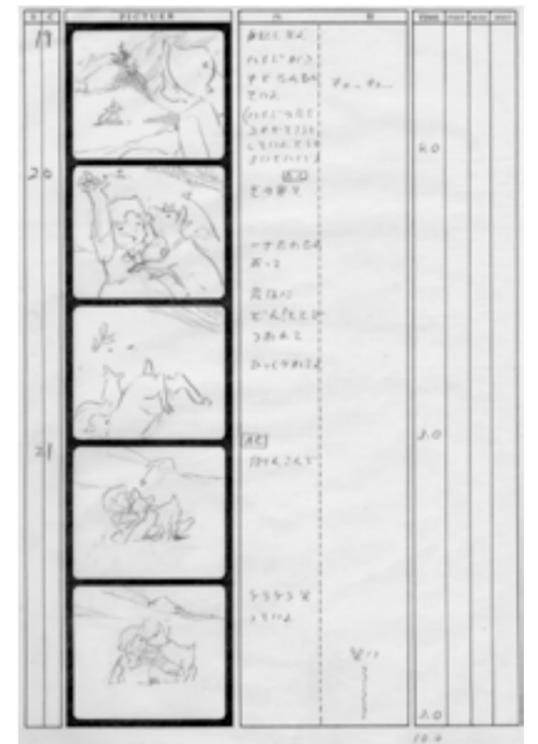
※2 本作で初めて本格的にアニメ制作に携わったのが宮崎駿であり、シーン設計から小道具・衣装デザインまで担当した。また、本作のキャラクター・デザインや作画には、岡山出身の洋画家・岡本唐貴の息子で漫画家の白戸三平による『カムイ伝』ほかの作品の絵柄が大きく影響しているという。

※3 高畑前掲書434頁。

※4 本作の作画を統括した田辺修と原作者のいしいひさいちも岡山出身で、奇遇にも、原作者・監督・作画統括が岡山出身者による作品であった。

【特別展】「高畑勲展—日本のアニメーションに遺したもの」

(会期:2020年4月10日～5月24日)



『アルプスの少女ハイジ』絵コンテ ©ZUIYO「アルプスの少女ハイジ」公式ホームページ <http://www.heidi.ne.jp/>

まず一步、そして次の一步へ

教育普及展 第1回 みんなの参観日「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」を終えて

岡本 裕子(主任学芸員)

「ミュージアムで夢を語る」と題して館ニュース(124号-2019年SPRING)を書いてちょうど一年が過ぎた。一年前は「授業展—図工の時間・美術の時間—(仮称)」としていたが、その後ワーキング・グループで話し合いを重ね「みんなの参観日「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」」という名称に決定した。〈授業の展示〉〈実験的な展示〉〈次につながる展示〉の3つをキーワードに、「子どもの学びの姿・学びから生まれたことの展示」をコンセプトとした「みんなの参観日」は、岡山県小学校教育研究会図画工作部会、岡山県中学校教育研究会美術部会と当館が協働し、県内小学校4校、中学校6校の参加^{※1}で第1回を迎えることができた(前期:2020年1月12日~19日、後期:2月23日~3月1日)。一年前に「開かれた学校/開かれた美術館の姿を追求していきたい」と夢を語って走ってきたこの一年。一步を踏み出せたのだろうか。

先生と子どもたちが紡いだ図工の時間・美術の時間の子どもの学びを展示した第1回「みんなの参観日」を“参観者”の反応とともに振り返ってみたい。

前期は、小学校6年生2題材、中学校1年生1題材、2年生3題材、3年生1題材に取り組んだ子どもの学びが並び、後期は、一年間を通して美術の時間に取り組んだ中学校3年生の学び、そしてその後に中学校2年生2題材、1年生1題材、小学校6年生1題材、4年生2題材、3年生1題材に取り組んだ子どもの学びが並んだ(画像1、4)。現在図工の時間・美術の時間で学んでいる小中学生、未来の小中学生であるちびっこ、かつて小中学生だった高大生(未来の先生であ

り、未来の保護者であり、未来の社会人)、そして社会人、保護者、おじいちゃん、おばあちゃん、先生などなど幅広い層の方が参観に来てくださった(画像2、5)。

また、図工の時間・美術の時間を体験する場として、前期参加校・杉本正章氏(瀬戸内市立邑久中学校指導教諭)と後期参加校・大谷良子氏(津山市立津山西中学校教諭)、青山利通氏(特定非営利法人日本臨床美術協会資格認定会員 臨床美術士)を講師に迎えワークショップを実施した(「和菓子をつくろう」1月19日開催、「リンゴの量感画/リンゴを描く過程を楽しんでみましょう」2月23日開催)。ちびっこから大人まで幅広い層の参加者は美術の時間の体験と「みんなの参観日」の参観を行きつ戻りつしながら、笑顔があふれる時を過ごした(画像3、6)。

では、「みんなの参観日」参観者の反応をアンケートからいくつか拾ってみる。

○とても面白かったです。作品だけでなく、作品ができるまでの過程や教室の様子、ワークシートなども丁寧にアーカイブ、再現されていて、制作に取り組む児童生徒の様子を立体的に知ることができ、とても勉強になりました。〈30代/高校・美術教員/県外/来館して〉^{※2}

○授業を行う立場で見させていただいたが、導入から鑑賞まで、生徒の活動の様子がよくわかり、とても参考になった。子どもたちが楽しく制作している様子が伝わり、そのためには指導者側の準備や手立ての工夫が一層大切だと改めて考えさせられた。〈40代/教員/市外/その他〉

○一点一点、一人一人を大切にされている授業の様子や、一



4



5



6

点一点こんなにすてきでしょ〜ってという一点一点を大切に展示している美術館の思いがよく伝わってきました。教育とか図工と違ってことではなく、ただアートが好きという人々も、何気なく見始めてやがてじっくりと見入ってしまうような展示だったと思います。〈60代/教員/市内/新聞・チラシ・学校・先生・その他〉

○生徒たちの取り組んだ思いが作品を通して伝わってきました。この催しを企画運営していただけて感謝します。そして、日頃より指導いただいている先生方ありがとうございます。展示に至るまでの過程もすごく伝わってきました。会場でのTV動画も普段の様子が伝わってよかったです。久々に感動。〈40代/会社員/市外/チラシ〉

○どの作品もアイデアいっぱい、見ていて思わずクスッとなるもの、ほお〜となるものの連続でした。サッと見て帰るつもりでしたが、力作ばかりで感嘆しどおでした。〈60代/無職/市外/来館して〉

○図工・美術の授業を含めて、子どもの創造活動は、結果が問題ではなくその過程こそに意味があると考えます。その点、この「授業風景」は「楽しそう」「私や私の子どもこんな授業を受けたかった」と思いました。子どもたちはまた一つ自らの感性に自分なりの灯りを灯したことでしょう。〈60代/主婦/市内/来館して〉

○同じ材料や主題を与えられたとしても、全く異なる作品ができることに驚きました。また、美術教育とは、ただその作品や手法などの表面的なことを教えるのではなく、作品の後ろに広がる人間や社会を学ぶことにも繋がるということを知りました。もっと美術教育が広がってほしいと思いました。沢山のことを吸収できる幼児期から自立へと進む中高生までの学生が授業でつくるものと思い、あまり期待せず見始めたのですが、子どもたちやそれに関わる大人たちの熱量のすごさに涙が出るほど胸を打たれました。作品それ

自体も楽しく見ることができました。素敵な企画をありがとうございました。〈20代/フリーター/市内/来館して〉

前期・後期の参観者数1,507人のうち208人の方が記述式のアンケートに回答してくださいました。アンケートの数々の言葉に力をもらい、それが次へのエネルギーとなる。ワーキング・グループや参加校の先生と展示内容や展示空間、参観者の様子を見ながら洗い出した課題を3つ挙げておく。

□小学校から中学校(特別支援学校小学部・中学部含む)までの義務教育9年間の図工の時間・美術の時間の「子どもの学びの姿/学びから生まれてくること」を、発達段階とともに展示するためには、「何を」「どう展示」することができるか。

□ワーキング・グループメンバーや参加校の先生と双方向のやり取りをする時間をいかに確保するか。

□参観者が図工の時間・美術の時間を体験することができる場や、そこに集う参観者同士が図工の時間・美術の時間を介して多方向で交流する場をどう仕掛けていくことができるか。

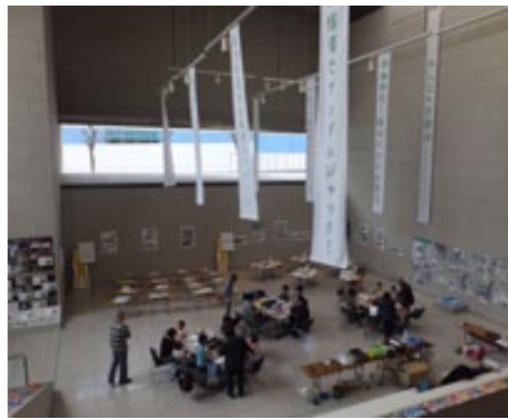
第2回「みんなの参観日」は、前期:2020年12月13日~27日、後期:2021年1月10日~24日に開催することが決定した。次の一步はすでに始まっている。“子どもたちやそれにかかわる大人たちの熱量”で開かれた学校/開かれた美術館の姿を追求していきたい。

※1:参加校

前期|赤磐市立磐梨小学校、倉敷市立庄小学校、瀬戸内市立牛窓中学校、瀬戸内市立邑久中学校、真庭市立落合中学校

後期|ノートルダム清心女子大学附属小学校、倉敷市立二万小学校、赤磐市立桜が丘中学校、瀬戸内市立長船中学校、津山市立津山西中学校

※2:〈年齢/職業等/お住まい/「みんなの参観日」を何でお知りになりましたか〉



1



2



3

新収蔵品紹介



作者不詳《風流陣図屏風》(上から右隻、左隻) 江戸時代(17世紀) 各155.1×361.4(cm) 本館蔵

File 15

作者不詳《風流陣図屏風》
河野 琴乃(学芸員)

平成30年度、津山市の旧家に伝わった華やかな六曲一双の屏風が当館に新たに収められることになった。その名も《風流陣図屏風》。「風流陣」とは、五代の王仁裕が撰述した『開元天寶遺事』に収められた玄宗皇帝と楊貴妃にまつわる逸話のひとつである。これによると、玄宗と楊貴妃は太液庭において、武器に見立てた花枝を持たせた女官たちを二手に分け、戦の真似事をさせたといわれている。この『開元天寶遺事』に収録された玄宗と楊貴妃の逸話は、元和9(1623)年に狩野一溪(1599-1662)がまとめた画題集の『後素集』にて広く紹介され、ふたりに関する物語を描いた作品が質・量ともに増加した。このたび受贈した作品もそのような流行のうえで制作されたものである。

本作では右隻第三扇に玄宗、左隻第四扇に楊貴妃がそれぞれ椅子の前に立つ形で配されており、ふたりを取り巻く女官たちは手にした花枝で互いの身体を打ち合っている。金雲からのぞく、異国情緒を誘う鮮やかな彩色が施された宮殿

と、細身でしなやかなプロポーションの人物がいて、画面全体に優美な趣が漂う。女官たちが枝をふるうたびにあたりには広がる花の香りや、きゃらきゃらとした笑い声がいまにまで届いてきそうさ。

ところで、「風流陣」の様子を描かれた作品のひとつとして、狩野派による《風流陣・明皇蝶幸図屏風》(MOA美術館蔵)が存在する。そこには、本作の右隻第五扇に描かれた女官たちと同様の姿勢をとるものがあるなど、5か所にわたって共通の図像が用いられている。この画題に対して型となる図像が存在していることがうかがえよう。

さて、風流陣図では玄宗と楊貴妃の享樂的な一瞬が切り取られているが、白居易の長恨歌でもよく知られているようにふたりの物語の結末は悲しいものである。楊貴妃に溺れ政をおろそかにした玄宗に対して安祿山が蜂起する。玄宗は都を追われ、最後は愛する妃の殺害を許すこととなった。この風雅な画面の裏には、享樂に溺れることへの戒めが含まれているのだろう。

展覧会スケジュール

4月
April

4月10日|金—5月24日|日|

【特別展】

高畑勲展

—日本のアニメーションに遺したもの—

「アルプスの少女ハイジ」(1974)や「火垂るの墓」(1988)、「平成狸合戦ぽんぽこ」(1994)や「かぐや姫の物語」(2013)といった誰もが知っている作品を生み出したアニメーション監督・高畑勲(1935-2018)。常に今日的なテーマを模索し、それにふさわしい新しい表現方法を徹底して追求した高畑は、戦後の日本のアニメーションを牽引し続けるとともに、国内外の制作者に大きな影響を与えました。本展では、絵を描かない高畑の演出術に注目し、制作ノートや絵コンテなどの多数の未公開資料も紹介しながら、その革新性や創造の秘密に迫ります。

展覧会や各関連イベントなどの最新情報は
公式ホームページにて随時公開中
<https://okayama-kenbi.info>

4月12日|日| 14:00~15:30

記念講演会 「高畑勲の
革新的アニメーション演出術
—『火垂るの墓』を中心に—

講師 叶精二氏(映像研究者・亜細亜大学講師)
会場 2階ホール(先着210名) ※申込不要、要観覧券(半券可)

5月
May

4月10日|金—5月24日|日|

【岡山の美術展】

2020 東京オリンピック・パラリンピック協力事業

令和おとぎ草子

桃太郎 KAMISHI by 松井えり菜

倉敷市出身の松井えり菜(1984-)は、大胆な構図と迫真の描写による自画像を中心に独自の絵画表現を展開しています。このたびは東京オリンピック・パラリンピック協力事業として、岡山ゆかりの「桃太郎」を描いた紙芝居原画、邦楽の若手囃子演奏家が集う「若獅子会」とのコラボレーションから生まれた映像作品、絵画・立体作品により、新たなおとぎ草子の世界をお楽しみいただけます。

4月24日|金| 18:30~19:00

美術の夕べ 「令和おとぎ草子 桃太郎
KAMISHI by 松井えり菜」
フロアレクチャー

講師 古川文字(当館学芸員)
会場 2階展示室 ※要観覧券

4月25日|土| 14:00~15:00

記念演奏会 「令和おとぎ草子 桃太郎
KAMISHI by 松井えり菜」
記念演奏会 feat. 若獅子会

演奏 若獅子会(囃子演奏家)
会場 2階ホール(先着210名) ※無料

6月
June

6月5日|金—7月12日|日|

【特別展】

The 備前—土と炎から生まれる造形美—

「備前焼」は、釉薬を施さず焼締める素朴なやきもので、焼成によって生まれる変化に富んだ窯変が見どころです。本展は東京国立近代美術館工芸課長唐澤昌宏氏の監修により選りすぐられた作品と本拠地ならではの古備前や細工物をプラスし、さまざまな関連事業を実施することで、観て、使って、楽しい備前焼の魅力を紹介いたします。

6月7日|日| 13:30~15:00

記念講演会 「備前焼の魅力と作風の展開
—桃山時代から現代まで—

講師 唐澤昌宏氏(東京国立近代美術館工芸課長・本展監修者)
会場 2階ホール(先着210名) ※無料

6月13日|土| 13:30~16:00

フォーラム 「備前焼フォーラム」

第1部「各窯業地からみた備前焼」
第2部「備前焼のこれからを考える」
パネリスト

〈第1・2部〉松崎裕子氏(益子陶芸美術館学芸員)、
市来真澄氏(山口県立美術館・浦上記念館学芸員)、
マルテル坂本牧子氏(兵庫陶芸美術館学芸員)
〈第2部〉伊勢崎創氏、矢部俊一氏、
伊勢崎晃一朗氏(出品作家)

会場 2階ホール(先着210名) ※無料

坂田一男のこと

守安 収

昨年12月から東京ステーションギャラリーで開催されていた「坂田一男 捲土重来」展が当館に巡回してきました。美術家で評論家としても著名な岡崎乾二郎氏が監修した展覧会で、本日(2月18日)がオープンです。岡崎さんが展示に凝りに凝ったおかげで東京会場とはまた別の魅力を湛えた素晴らしい展覧会場に仕上がっています。ちなみに私どもでは岡山県人である坂田(1889-1956)作品を寄託品も含めて相当数収蔵しており、2007年には「坂田一男展」を単独で開きました。▼さて、開館(1988年3月)準備に当たっていた私は、「岡山の美術」の洋画部門の大きな柱は坂田と国吉康雄の二人だと確信していたものを持っていました。明治の松岡寿・原田直次郎・原撫松、大正昭和の鹿子木孟郎・満谷国四郎・赤松麟作といったまとまりを作り、そして坂田・国吉へと続くラインです。私は洋画については門外漢ですが、そう信じていたのです。坂田さんの作品は、当館の前身である岡山県総合文化センターに先輩たちの尽力で30点ほど入っていましたが、油彩画の傑作といえるものは少数でした。そこでオープン前に購入をと動き、いくつかは叶ったものの、コアな所蔵者—坂田さんを信奉する方々が多くて皆さんに手放す決断をしていただくまでには至りませんでした。▼今回、展覧会の準備中に嬉しい知らせが届きました。ご遺族の方々が残らずご寄贈の意向をお示しくださったのです。デッサン類が多いとはいえ、油彩だけでも50点、スケッチブックなども含め総数は248件に上ります。岡山で坂田さんを大切に守り伝えたいという大勢の気持ちが一いつになったことに感謝するばかりです。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

三井麻央

この館ニュースが皆さまのお手元に届くのは「坂田一男 捲土重来」展が閉幕し、来年度の展覧会スケジュールが発表されている頃でしょうか。このたびの坂田展は監修者である岡崎乾二郎氏による鋭い着眼点と分析が冴えわたる展覧会で、坂田作品の新たな可能性を日々感じるごととなり、準備にたずさわったこちらまでもが圧倒されてしまいました。来年度の展覧会も、家族みんなで楽しめるものから、当館のコレクションを活かしたものでさまざまに準備しています。ぜひリーフレットやウェブでチェックしてみてください。